

新出資料 竹苞楼蔵板木台帳紙背

「覚勝院抄（断簡）」——影印と解題——

永井一彰
上野英子

一 ことこのいきさつ

現在も京都寺町姉小路上ルに店を構える竹苞楼（現、竹苞書楼）は、代々佐々木惣四郎（佐々貴・鶴鶴・娑々岐とも、また錢屋とも）を名乗る寛延四年の創業になる古書肆で、近世期の本屋の面影を残す店構えでも知られる。同店はまた近世以来の板木を大量に保存しているということでも有名であったのだが、思い立つことあって同店蔵の板木約二千五百枚を奈良大学へ搬入し整理・調査を開始したのは、平成十六年四月のこと。七代目御当主佐々木英雄氏との最初の約束では、数年かけて整理をし、目録を作成して板木のデータを採ったあと御返しする予定であったのだが、同年十二月に氏から一括譲渡の御相談があり、膨大な量の板木は、十七年六月、奈良大学の蔵に帰することになった。その板木、大略分類したところによれば、漢詩文集・伝記・随筆・和歌集・雑俳書・狂詩狂文集・有職故実

書・辞典・茶道書・紀行文・歌集注釈書・四書五経・画集・史書・狂歌集・滑稽本・書道手本・本草・仏書・印譜・篆刻書・硯譜等々、ジャンルは多岐に亘る。これらの板木は一年ほどかけて整理・調査したあと、十八年十月に奈良大学で開催された俳文学会第58回全国大会に合わせて「出版の現場から―竹苞楼旧蔵狂詩・狂文集の板木を中心に―」と題して展示史料目録を作成すると共に、奈良大学通信教育部棟展示室（現博物館展示室）で四十日に及ぶ展示を行ないその一部を一般公開し、その後も具体的な調査結果については、拙稿「竹苞書楼の板木―狂詩集・狂文集を中心に―」（奈良大学総合研究所報十五号、平成19年3月刊）、「山家集抄」のいれき入木」（同十六号、20年3月刊）などで発表して来た。また、十九年春には立命館大学アトリサーチセンターとの共同研究として、板木のデータベースの話が持ち上がり、竹苞楼旧蔵のものをはじめ、藤井文政堂旧蔵で十数年前にやはり奈良大学の蔵に帰した約五百枚、それに現在本学へ寄託されている文政堂現蔵の約五百枚、さらに十九年秋に大阪の中尾松泉堂から引き取った高野版の板木約四百枚、また本学所蔵の浮世絵復刻版の板木約五百枚、その他のものも含め合計五千枚ほどの板木の基礎データ約八万コマの撮影を二十年三月に完了し、二十二年二月にはネットでの一般公開のはこびとなった（乞検索「板木閲覧システム」）。

さて、十八年の秋に展示を行なった折の会期末近く、文政堂の六代目当主藤井佐兵衛氏と連れ立って見学に来られた佐々木英雄氏から「こんなものも出て来ました」として託された資料がある。それが、『蔵板員数』『蔵板仕入簿』『板木分配帳』『竹苞楼蔵板員数帳』の四点の蔵板台帳であった。この四点の蔵板台帳の書誌・概略を旧稿「板木の分割所有」（奈良大学総合研究所報十七号、21年3月刊）から再録してみる。

『蔵板員数』

横本一冊。寸法、縦150×横216耗。渋茶色表紙。前表紙に「蔵板員数」、後表紙に「竹苞楼」と墨書。全二百四丁。所々に余白を残し、その数三十二丁半。従って、墨付は百七十一丁半となる。元々は万延元年に六十一才で没することになる竹苞楼三代春蔭が嘉永・安政頃に調製したものと思しく、四代春明（明治十四年五十九才没）、五代春吉（昭和二十六年七十三才没）と引き継がれ、昭和二十三年一月に至るまで折々に書き込みをして来ている。記されているのは、書名と板木枚数、相合か単独所有か、そして相合の場合は所持分の板木の板前、丁数、それに後日の板木移動などである。収録書目は全三百七十二点に及ぶ。

『蔵板仕入簿』

半紙本一冊。縦230×横161耗。山吹色地に亀甲花形模様空押し表紙。前表紙中央に「蔵板仕入簿」、後表紙に「竹苞楼」と墨書。専用箋に、書名、冊数、丁数、紙・表紙・摺り質など諸費用、相合先、軒前、板質などを記入。全百九十一丁。内、余白は計十八丁半。この専用箋には一丁につき二点が書き込めるようになっており、合計三百四十五点が記入してある。これもまた『蔵板員数』と同じ頃に三代春蔭によって調製され、四代春明・五代春吉が折々に書き入れをして来たと思われるもので、昭和二十年三月までの書き込みがある。なお本書見返しに「明治十六年一月より改正蔵板仕入帳用也」とあり、春明の代に改正版が目論まれたらしいが、その後もこの元版に書き込みがあるところからすると、改正版は結局使われなかったらしい。『蔵板員数』には「相合」とだけ記されているものが、こちらで具体的にその相合先が分かるケースがある。

『板木分配帳』

大本一冊。縦247×195耗。薄茶色横刷毛目表紙、紗綾形模様の空押しあり。表紙中央に大きく「板木分配帳」と墨書きし、左右に小さく「明治七年」「戌三月辰」と書く。後表紙に「竹苞楼蔵」と大書。全三十三丁。「南側之部 第壹号（〜第八号）」「東側之部 第壹号（〜第廿八号）」「北之部 第壹号（〜第四号）」「西壹号」「土間之部」などと分け、三百九十三点の書名・板木枚数を記入する。板木の収納場所の台帳である。年代の書き込みを調べてみると、明治二十三年から大正九年までに限られており、表紙にあるように明治七年に四代春明によって調製され、五代春吉の手許で使用されてきたものであることが分かる。

『竹苞楼蔵板員数帳』

大本一冊。縦256×186耗。薄茶色横刷毛目表紙。左肩に双辺白地題簽「昭和八年改正／竹苞楼蔵板員数帳」と墨書き。第一丁冒頭部に「蔵板員数帳 昭和八年／七月調査」とあり。本文は鳥の子の上質紙。全三十三丁、うち墨付き二十丁。『板木分配帳』と同様、「北第壹号（〜八号）」「西第壹号（〜六号）」「東第壹号（〜三号）」と分けて、百十五点の書名・板木枚数を記録する。年代の書き込みは昭和九年から二十三年三月まで。五代春吉が『板木分配帳』をもとに再整理を企てたものようであるが、『板木分配帳』に比べて収録点数が極端に少ないことから分かるように、結局は『板木分配帳』を主に使用して、こちらは途中でそのまま放置されたかの如き感がある。

右四点の蔵板台帳のうち、注目すべきは『蔵板員数』『蔵板仕入簿』で、この二点と現存の板木それに対応版本を照合することによって分かって来る近世後期京都本屋の板木分割のありようについては、前引拙稿「板木の分割所

有」に評述した。また、四点の中で最も興味をひく『蔵板員数』は、出版史料としての重要性に鑑み、拙著『藤井文政堂板木売買文書』（平成21年6月、青裳堂書店刊）に全文を翻刻紹介したところである。

『蔵板員数』『蔵板仕入簿』に比べると、『板木分配帳』『竹苞楼蔵板員数帳』の二点は要するに板木の収納場所の台帳なのであって、出版史料としての魅力にはやや欠けるため、精密な調査が後回しになっていたのだが、その後よく見てみるとこの二点、何れも古写本の紙背を使用していることに気付いた。そこで、佐々木氏のお許しを得て、『板木分配帳』の紙縫り綴じをはずしてみたところ、三十六丁全ての紙背が『源氏物語』の注釈書として知られる『覚勝院抄』の一写本であることが判明した。収録するのは「幻」の半分ほどと「匂宮」全文に過ぎないが、『覚勝院抄』の自筆稿本かとされる穂久邇文庫本の影印複製本『源氏物語聞書』（野村精一・上野英子編、平成二年汲古書院刊）と対校してみると、仮名づかい・書式などが酷似し近接した関連性が認められ、素人目にも重要な資料であることが歴然である。が、奥書が残らないため筆者・書写年代なども不明で、穂久邇文庫本を含め十数本残存する写本の中の位置付けということになると、これはもう私の及ぶところではなく、ことの経緯のみ記して、あとは上野英子氏にバトンをおわたしする次第である。

（永井一彰）

追記 この稿の校了間際の平成二十三年三月上旬、四点の蔵板台帳は竹苞楼から奈良大学に譲渡された。従って、今現在のもののありようからすれば、該書『板木分配帳』は「奈良大学蔵」と、その紙背の『覚勝院抄』も「奈良大本」と称すべきであるが、ことのいきさつを明確に伝えるためにも、この稿では「竹苞楼蔵」「竹苞楼本」の呼称を残すことにした。

二 竹苞楼蔵「覚勝院抄（断簡）」について

解体され、『板木分配帳』として再利用される以前、すなわち『覚勝院抄』として書写された当初の本書（以下、「竹苞楼本」と略）の姿は一体どのようなものだったのか、『覚勝院抄』側から見た本書の書誌は以下ようになる。

【表紙】 現行表紙（表・裏とも）に施された洪引きは、『板木分配帳』として製本された時のものである。表紙が、冊子の表紙等によく見かける全面に紗綾型空押文様の入った白地の上質紙であるのに対して、裏表紙には空押模様がない。但し裏反故に刷物を使用したらしく、「一の御臺盤に供し索餅／して御飯の蓋と警子と」等の文言が裏表紙と後見返しの糊の剥がれ目から、かろうじて読み取れる。ともあれ、現行の表紙は表裏いずれも、本文料紙とは綴じ孔の数が一致せず、『覚勝院抄』時代の表紙とは無縁なようである。

【綴じ孔】 表紙の綴じ孔はのどから約一・五糎程離れたあたりに四つあり、これが『板木分配帳』（大和綴じ）の跡である。孔目がかなり大きいのは、紙こよりで綴じられ、しかもこれまで何度も綴じ直されてきたためだろう。

一方、前後見返しおよび本文料紙における綴じ孔は、『板木分配帳』の四孔以外に a b 二種類（計八孔）あり、『覚勝院抄』時代に穿たれたものと思われる。a はのどから約〇・五糎あたりに付けられた比較的大きな四つの孔で、b はのどぎりぎり、あるいはのどの裁断線に添って散見する四つの孔。かなり注意しないと見落としかねないが、a とほぼ横並びに付いている。大きさから見て a は紙こよりの、b は糸綴じの孔だろう。普通は紙こよりの孔の方がのどの奥深くに付けられるもののように思うが、ここでは逆転している。『覚勝院抄』時代にも複数回にわたって化粧裁

ちと綴じ直しを経てきた跡だろうか。

【表紙寸法】 現行の表紙寸法は縦約二四・七×横約一九・六糎。しかしこれはこれまでになされてきた複数の化粧裁ちに因るもので、『覚勝院抄』時代には縦・横ともっと大きかったと思われる。因みに、『覚勝院抄』第一八紙目左三行目に記された長い行間注「九条右丞相師輔公ノ御女ヲ……」が、料紙の地辺あたりまでおりてきて「……下心ニ／含テ／書也」の「ニ」文字が途中で切れているし、第六紙目右六行目のこれまた長い行間注「御年ヨリハ実法ナルト……」が「……心ハサモ／ナキ物／ヲト也」の「モ」「也」文字が途中で切れている。共に後代化粧裁ちの跡だろう。

【料紙】 本文料紙は楮斐漉き混ぜ。厚手の料紙である。さて現行冊子のうち『覚勝院抄』時代の料紙と思われるのは、紙質・綴じ孔・本文からみて、以下に示す三種三九葉である。

(イ) 前後見返しに用いられた料紙二葉（ともに白紙）

(ロ) 本文料紙に使われた三六葉

(ハ) 葉代わりに用いられたと見られる半葉

このうち(ハ)は縦二四・六×横一六・六糎の半葉。綴じられることなく、二つ折りにされて冊子に挟まれていたものである。おそらくは葉代わりに用いられていたのではあるまいか。『板木分配帳』の寸法と比較するに、横幅が三糎ほど短い。綴じ孔が見られないのはそのためだろう。この半丁の裏面には「南側の部／第壹号……」以下『板木分配帳』一丁オとよく似た本文が記入され、しかる後に大きな抹消線を引かれている。

さて『覚勝院抄』の本文が記されたのは、(ハ)の半葉と(ロ)の三六葉だが、これらの本文はすべて一筆で、朱筆部分も含めて、底本をきれいに清書した本文と思われる。数カ所、後代の書き入れかと疑わしい文字も入るようだが、朱墨両部分ともに清書本として作成されたであろうことは間違いない。

【内容】「幻」の一部と「匂兵部卿」全冊である。『覚勝院抄』の場合、普通は穂久邇文庫本のように「御法」「幻」「匂兵部卿」の三帖（六八丁）で一冊にまとめることが多いのだが、竹苞楼本の場合は「御法」が無く、「幻」の冒頭四丁と中間の六丁半を欠いている。詳細は文末に掲げた「竹苞楼本・穂久邇文庫本対照表」ならびに「三『竹苞楼蔵覚勝院抄（断簡）』影印 付『板木分配帳』」を参照されたい。

【本文系統】『覚勝院抄』の写本はこれまで一八種類ほど確認されており、それらは第一群初期稿本系 第二群流布通行本系 第三群後期増補本類 の三つに大別されると思われる。第一群は穂久邇文庫本とその転写本からなる三本で、「帚木」の青墨書入れといった顕著な特色と、講釈台本として用いられた痕跡を有し、稿本性の強い本文である。第二群は書陵部桂宮本等の一二本で、第一群三本に共通する青墨書入れ等の特色を持たない。この後代書入れを持たないことが逆に初期の姿を留めているとも考えられ、かつ最も世間に流通した本文である。第三群は文字通り後代にあってそれぞれ独自に追加注を施された写本類であり、実践女子大学常磐松文庫本など三本が確認されている。因みに常磐松文庫本の場合は、『孟津抄』『岷江入楚』『湖月抄』等からの追加注が多数書き入れられている。なお詳細は、野村精一・上野英子編『源氏物語聞書 覚勝院抄 別冊』（平成三年 汲古書院刊）を参照されたい。

さて、こうした諸本群にいま新たに竹苞楼本が加わったわけである。本文異同の詳細は「翻刻・校異」と併せて次号で解説する予定だが、結論を述べるならば、竹苞楼本は第二群流布通行本系と判定できるようである。というのは、第一群の穂久邇文庫本や第二群の書陵部桂宮本と比較すると、竹苞楼本には意図的に加えたと思しき独自の注の書き入れはなく、その意味で常磐松文庫本のような第三群でないことは明かである。さらに竹苞楼本の本文が穂久邇文庫本と対立した場合、その多くが書陵部桂宮本と一致しており、中には穂久邇文庫本に無い注記を竹苞楼本と書陵部桂宮本とが共有する例もあるからである。

最後に、今回の調査で判明した興味深い異同例を一つだけ紹介しておこう。

竹苞楼本第二一紙左は、穂久邇文庫本四八ウに相当する。「匂兵部卿」の冒頭、物語が始まる前の所謂〈巻頭注〉の部分である。ここには、並び・巻名の由来・年立に関する説明以外に、「幻」と「匂兵部卿」の間に介在する書名のみで実態はない「雲隠」巻に関する注が記されているのだが、その「雲隠」に関する注のなかに

…雲隠といふ巻なければ落つかぬなり

其子細は其内に人の逝去以下の事_レ在之也雲隠と

いふ巻の闕事益網経にも書_レの名ハありてな

き事_レ在之其とおなじ事となり…（巻頭注六行目。引用は竹苞楼本48ウ④⑦行目）

という文章があり、しかもそれらの注の行間には更に

雲隠巻ヲ可書ナラバ源氏ノ誕生カラ和漢ノ能芸万事美麗天下ノ右族已下一世五十二ノ間ノ事ヲ不残書嗟峨院ニ隱遁テ臨終ノ事マデヲ書テモ只に物語ノ次也所詮不書シテ雲隠巻ノ内ニ籠ラセタル事紫式部ガ奇妙源心ミヘタル也シカルヲ前ミノ卷々ニ更衣ノ事葵上紫上以下ノ哀ナル事ノ共ハ書盡シタルニ依テ不書ト云説在之以外ノ悪説也…（行間注、引用は竹苞楼本）

という細字注が加わっている。

問題なのは右の二つの引用文中、巻頭注引用文に私に文字を囲んだ「書」と、行間注引用文に施した傍線部分「更衣ノ事」である。先ず竹苞楼本と書陵部桂宮本を見ると、「書」の右脇に「シヨ」という振り仮名がつき、行間注はこの振り仮名を迂回した形でしるされている。意味的にもこれが正しい形である。ところが穂久邇文庫本は振り仮名「シヨ」が「書」の文字から離れ、行間注の中に紛れ込んで、結果、傍線部が「シヨ更衣ノ事」と意味の通じない文

章になっているのである。これは誤写であり、自筆稿本であるなら絶対に起こりえない現象であろう。

では正しく書写された竹苞楼本や書陵部桂宮本の方が古く、穂久邇文庫本は後代の誤写本かといえば、ことはそう簡単ではない。清書本ならぬ草稿本を写したからこその誤写ともいえるからである。同じような例としては、「桐壺」(5才)で穂久邇文庫本に記されてあった「聞書」という肩付きを、その転写本である国会図書館本や天理図書館蔵万治奥書本が頭注の本文中に紛れ込ませてしまった例がある。これなどは、穂久邇文庫本の複雑極まる書入れ様態をみれば無理からぬ誤写と、苦笑と同情を禁じ得ない第一群諸本内での異同例である。竹苞楼本や書陵部桂宮本の場合は、彼等の親本(現存する第二群諸本中に親本を特定できるかは不明。とりあえずこうした言い方しておく)が、正しく書写していたという可能性も考えられるだろう、ともあれ、穂久邇文庫本は寄合書であり、前半の巻々に顕著であった稿本性も巻が進むにつれて次第に薄れてゆくことも事実である。各冊毎に再精査してみる必要があるであろうである。

(上野英子)

竹苞楼本・穂久邇文庫本対照表

凡例

- (一) 本表は、竹苞楼本を、覚勝院抄諸本中唯一その影印が公刊されている穂久邇文庫本と対照させたものである。
- (二) 〈番号〉欄には、竹苞楼本覚勝院抄の番号を記した。この番号は、綴じ糸を切り、二つ折りにされていた

31	32	33	34	35	36	×	番号		
31 オ・ウ	30 オ・ウ	29 オ・ウ	28 オ・ウ	27 オ・ウ	26 オ・ウ	1 オ・ウ 25 ウ	穂久邇文庫本		
穂久邇本「御法」（1〜21丁） 「幻」（22〜25丁） 「幻」大成一四〇六頁⑤行目「給 へる身なるへし〜」。 大成一四一〇頁⑬行目「〜おもし ろ」まで。							備考		
14	15	16	17	18	19	20	21	22	番号
55 オ・ウ	54 オ・ウ	53 オ・ウ	52 オ・ウ	51 オ・ウ	50 オ・ウ	49 オ・ウ	48 オ・ウ	47 オ・ウ	穂久邇文庫本
「幻」47オで最終本文。ウは両 本とも白紙。 「匂兵部卿」冒頭（巻頭注）									備考

料紙を一枚に抜けて撮影した際に、各料紙の右肩に小紙片を置き、「1」から「36」の数字を入れたものである。『板木分配帳』の順序通りに数字を置いたため『覚勝院抄』としてみると順序が逆になっている。

なお葉として使われたらしい半葉については、写真では小紙片のみを置き、番号は入れなかった。よって〈番号〉欄においては、この半葉は「葉」として掲げて『覚勝院抄』の当該箇所に編入した。また穂久

邇文庫本と比べて当該丁を欠くものには「×」印を付しておいた。

（三）〈穂久邇文庫本〉欄には、竹苞楼本当該丁に対応する穂久邇文庫本（『源氏物語聞書覚勝院抄』平成三年 汲

古書店刊）の丁数を記した。

（四）〈備考〉欄には、池田亀鑑『源氏物語大成 校異篇』（昭和四六年 中央公論社刊）の該当箇所その他の参

考情報を示した。

23	24	25	26	27	28	29	30	×	葉	×		
46 オ・ウ	45 オ・ウ	44 オ・ウ	43 オ・ウ	42 オ・ウ	41 オ・ウ	40 オ・ウ	39 オ・ウ	38 オ・ウ	37 ウ	32 オ 37 オ		
<p>竹苞楼本にナシ。 大成一四一五頁③行目「などおほしやる」〜同⑨行目「とり給て」竹苞楼本にナシ。 大成一四一六頁⑤行目「まどをうつ」</p>												
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
68 オ・ウ	67 オ・ウ	66 オ・ウ	65 オ・ウ	64 オ・ウ	63 オ・ウ	62 オ・ウ	61 オ・ウ	60 オ・ウ	59 オ・ウ	58 オ・ウ	57 オ・ウ	56 オ・ウ
<p>「匂兵部卿」最終本文</p>												

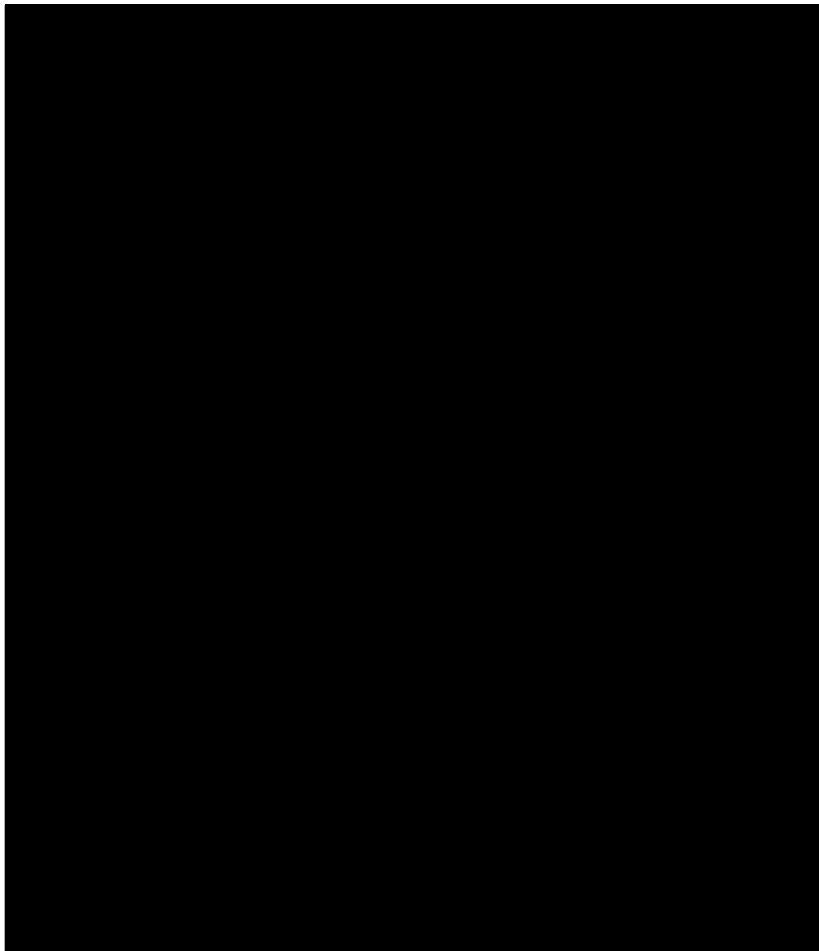
三 竹苞楼蔵『覚勝院抄(断簡)』影印、付『板木分配帳』

凡例

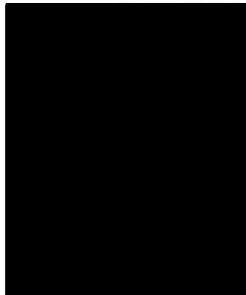
- (一) 上段には見開きで『覚勝院抄』の写真を掲げ、下段には『板木分配帳』の写真を掲げた。
- (二) 上段の写真は、『覚勝院抄』本来の丁付に従って、順序を入れ替え掲載した。葉として使用された半丁も同様である。

(三) 下段の写真は、『板木分配帳』の綴糸を切った状態で、後ろの方から順に並べておいた。また付箋がある場合はその写真も併せて掲載した。

(四) 上下段ともに、写真にはそれぞれ丁付を示しておいた。但し『覚勝院抄』の丁付は穂久邇文庫本相当箇所の丁付であり、『板木分配帳』の丁付とは一致していない。



「板木分配帳」表紙



前表紙見返し